

終戦70年

体験を語る

⑨

第2次世界大戦末期の昭和20年8月9日未明、ソ連が日本に対して宣戦布告、満州（中国東北部）や朝鮮半島に侵攻した。終戦後、投降した日本軍捕虜はシベリアなどに移送され、強制労働を強いられた。大分県宇佐市・円徳寺の前任職・酒井正知さん（95）もその一人。4年に及ぶ抑留生活と、葛藤の中で過ごした戦後70年を語った。

部下の遺体に息をのむ

シベリアの葬儀で正信偈

揺れる陽炎かげろふの中を横ですが、決して忘れる比較的確やかでした。一列で迫ってくる戦車 ことがありません。体が、1年、2年と戦局の大軍。飢えた体が欲が、あの体験を、戦争が進むにつれ、将校たするパンの匂い。異国を覚えていたのです。ちは手薄になった南方の大地に咲き揺れる夕 徴兵され、私が配属へ派遣されていきましソポポの花…。

されたのはソ連との国

今も鮮明に残る70年 境に近い満州西部のハ 前の記憶です。断片的

イラル（現・中国内モ



ハイラルで国境守備隊に就いてい た、23歳の頃の酒井正知さん。軍 曹だった

ハイラルは 当の戦い」の始まりで

8月15日から2、3 日後に終戦を知り、上 官の命令で白旗を掲 げ、投降しました。小 雨が降る中、丸腰で一 列になって陣地から降 りていく時、足元に横 たわる遺体を踏みか け、思わず息をのみま した。それは昨晩、私 の命令で敵陣へ切り込 んでいった部下でし んだタバコを焼香代わ りにして葬儀を営んだ こともあります。彼ら の遺骨は今もあの場所 に埋まったままなので しょう。

ソ連は捕虜に社会主 義の思想を植え付けよ うとしました。軍の階

また、お寺に帰って 私がご門徒に放った第

ソ連の教育に 染まっていた私は赤い 旗を振って喜びを表し ました。迎えてくれた 村長や大勢の村人に、 私はソ連で受けた薫陶 を弁舌したのです。

ソ連は捕虜に社会主 義の思想を植え付けよ うとしました。軍の階

また、お寺に帰って 私がご門徒に放った第

極度の飢え れんががパンに

8月15日から2、3 日後に終戦を知り、上 官の命令で白旗を掲 げ、投降しました。小 雨が降る中、丸腰で一 列になって陣地から降 りていく時、足元に横 たわる遺体を踏みか け、思わず息をのみま した。それは昨晩、私 の命令で敵陣へ切り込 んでいった部下でし んだタバコを焼香代わ りにして葬儀を営んだ こともあります。彼ら の遺骨は今もあの場所 に埋まったままなので しょう。

また、お寺に帰って 私がご門徒に放った第



シベリア抑留中も持ち続けた水筒を手に語る

大分県宇佐市・円徳寺前任職 酒井正知さん

度を下回る極寒の冬で も、汗をかいたのでふん どし1枚になって労働 しました。 一番きつかったのは、やはり極度の飢え。 1日の食事は真っ黒な パン400グラムと油 の浮いた羊のスープだ けで、道端に落ちてい るれんががパンに見え ました。作業場に向か う途中のパン工場から 漂ってくる香りをどん なに恨めしく思ったこ とか。 冬はジャガイモが凍 らないよう交代で一晩 中転がし、春には川べ りに咲くわずかな野草 を争って食べました。 疲労と栄養失調で亡 くなる人も珍しくな りました。私が正信偈をおつ とめし、仲間たちが刻 んだタバコを焼香代わ りにして葬儀を営んだ こともあります。彼ら の遺骨は今もあの場所 に埋まったままなので しょう。

この町で3年過ご し、さらにもう1年、 ナホトカに留め置かれ た後、昭和24年9月に ようやく帰国が許され ました。大地に咲き誇 るタンポポの鮮やかな 黄色が目には焼き付い ています。

過ち認め、誤り 繰り返さない 京都の舞鶴港に着い て、出征から7年半ぶ りに故郷の地を踏みま したが、ソ連の教育に 染まっていた私は赤い 旗を振って喜びを表し ました。迎えてくれた 村長や大勢の村人に、 私はソ連で受けた薫陶 を弁舌したのです。

また、お寺に帰って 私がご門徒に放った第